

小学部研究の概要（4 年次）

1 研究対象教科

生活科

2 小学部研究の方向性

(1) これまでの研究の成果と 4 年次研究の方向

1 年次研究では、生活単元学習を対象とし、自分の思いを表現したり、相手の思いを受け止めたりしながら、共に活動する姿を目指した授業づくりを追究した。個々の実態や関係性を基に縦割りグループで学習集団を編成し、「具体的なヒト、コト、モノ」と関わる活動を工夫したことで、活動の楽しさを教師や児童と共有する姿が見られた。

2 年次研究では、生活科を対象とし、生活科の資質・能力を育むための授業づくりを追究した。「体験的、実地的な活動」を重視し、生活に関する様々な対象への気づきを促すことで、「もっとこうしたい」「こうしよう」と自ら考えながら、単元の目標に迫る姿が見られた。

3 年次研究では、引き続き生活科を対象とし、「関心を持って学び続ける支援」に重点を置いた。活動そのものを楽しみながら、徐々に生活科の内容に意識を向けられるように支援を講じた。結果、「やってみよう」という目的意識から「何でかな?」「どうなっているの?」という好奇心へと関心が広がる姿が見られた。ただし、その過程で、一人一人の興味や習熟度に応じて好奇心を喚起することが重要であることが明らかになった。

以上の成果を踏まえ、4 年次研究では、子供が活動の楽しさを感じ、その楽しさを生活科の内容の習得につなげていくことを目指す。特に、一人一人の実態に応じて「活動の楽しさ」と「内容への気づき」を結び付け、生活科の資質・能力を着実に育成するための学習活動や支援の在り方を明らかにしていく。

(2) なぜ、生活科なのか

小学部の児童は、普段の生活の中で、掃除や配膳、手伝い、買い物などに取り組んでいるが、活動そのものに関わってはいても、その良さや意味を十分に理解しないまま行っていることが多い。また、必要な習慣や技能が定着しておらず、教師の指示に従うだけで、主体的な行動につながりにくい様子も見られる。

生活科は、学習内容が「基本的生活習慣」「手伝い・仕事」「金銭の扱い」など実生活に直結しており、児童が生活とのつながりをイメージしやすい教科である。さらに、単元を構想する際にも、具体的に実生活に即した活動を設定しやすく、活動の良さや学びの意味を理解しやすい利点がある。学習指導要領においても、「各教科等との関連を図り、指導の効果を高めるように指導すること」と明記されており、当学部においても生活科を教育課程の中心に位置付け、他教科と関連させた指導を展開している。

以上のことから、児童が生活に即した具体的な活動を通して、生活科の資質・能力を育成することが日常生活をより豊かにするために不可欠であると考えた。

3 小学部研究の内容と方法

(1) 研究の内容

4 年次研究も、生活科を対象として実践を行う。研究内容は次のように設定した。

- 生活科の資質・能力の着実な育成に向け、児童が活動そのものを楽しみながら、生活科の内容に関わる問いを持ち、主体的に学ぶことができる学習活動や支援の在り方を明らかにする。

(2) 研究の方法

学習指導要領に示された目標及び内容を踏まえ、児童の実態をもとに、単元目標を設定するとともに、一人一人の実態に応じて持たせたい問いを想定する。その上で、単元目標の達成に向けて、授業者間で次の2点を検討する。

- ① 児童が活動に興味を持てるように、単元序盤には、活動そのものを楽しめるような身近で具体的な体験活動や、身体を大きく使って取り組む活動を設定する。
- ② 児童が生活科の内容に意識が向き始めた姿を捉え、そこから自分なりの問いを持てるように支援する。

支援については、児童が主体的に生活科の学習に取り組めるように、関心を持って学び続けるための支援を構想する。そして、授業を通して得られた具体的な姿をもとに、目標の達成状況を確認し、学習活動や支援を改善していく。

以上の方法により、生活科の資質・能力の着実な育成に向け、活動そのものを楽しみながら、児童が生活科の内容に問いを持ち、主体的に学ぶことができる学習活動と、関心を持ち続けられる支援の在り方を明らかにしていく。

4 4 年次研究の取組

今年度の小学部研究は、児童が活動そのものを楽しみながら、生活科の内容に問いを持ち、主体的に学ぶ姿を引き出すことを目指す。そのために、児童の実態に応じて期待する姿をあらかじめ設定し、それを実現するための手立てを明確にする。

さらに、生活科の内容に関心を持って学び続けられるように、「好奇心・目的意識」「見通し」「学ぶ喜び」を育む具体的な支援を次のように構想する。

(1) 好奇心・目的意識を持てるようにするための手立て

まず、児童が「目的意識」を持てるようにする。小学部の児童は、最初から生活科の内容に意識を向けることが難しい。そこで、単元序盤では、活動自体を楽しむ目的意識を喚起し、「楽しそう」「やってみよう」という思いを引き出すことを大切にする。

- 身体を大きく使って取り組む活動や、具体的な体験活動を繰り返し設定する。
- 実物や具体物を操作しながら取り組む学習活動を設定する。

こうした活動を重ねる中で、活動への目的意識が徐々に生活科の内容へと向かっていくようにする。

次に、児童が「好奇心」を持てるようにする。活動を楽しむ中で、生活科の内容に関わる部分に着

目した際に、「おや？何だろう」という思いが生まれるような支援を行う。

- 生活科の内容に関わる部分に注目を促しながら、教師がモデルを示す。
- 既習の経験や知識とのずれを生むように、新たな情報を提示する。
- 生活科の内容が際立つよう、教師と一緒に試したり、自由に触って試したりできる時間を十分に設定する。

単元を計画する段階で、生活科の内容に意識を向ける具体的な姿を想定しておくことで、児童の実態に応じた手立てを講じやすくなる。

(2) 見通しを持てるようにするための手立て

次に、児童が「見通し」を持てるようにする。単元序盤では、活動を楽しみながら「これでやってみよう」という思いを持てるようにし、単元が進むにつれて、生活科の内容に関わる問いを持った児童が、「こうすればいいのか」と感じられるようにする。

〈単元序盤〉

- 児童が楽しく活動できそうな取組方について、言葉と身振りを交えて繰り返しモデルを提示する。

〈問いを持ち始めた段階〉

- 授業で扱う生活科の内容を、擬音語や擬態語など児童に分かりやすい言葉で示す。
- 教師と一緒に取り組みながら考えたり、児童の思いを言語化したりすることで、自分に合った取組方を選べるようにする。

(3) 学ぶ喜びに気付けるようにするための手立て

最後に「学ぶ喜び」に気付けるようにする。

① 「自分自身の価値」に気付く手立て

単元序盤では、「〇〇をして楽しかった」や「△△ができた」という思いを持ち、「またやりたい」という意欲につなげる。

- 児童が楽しそうに取り組んでいる様子を写真や動画で確認し、教師がその時の気持ちを代弁する。
- 「△△ができたね」と即時に言葉掛けしたり、ハイタッチをしたりすることで、できたことを児童が実感できるようにする。
- 児童が取り組んだ内容が分かるイラストや写真をカレンダーに示し、できたことに花丸を書いたり、シールを貼ったりすることで、学習の進捗状況を視覚的に確認できるようにする。

② 「教科等の内容の価値」に気付く手立て

生活科の内容に関わる問いへの答えを見いだしたときに、「そういうことか」「□□が分かった」と感じられるようにする。

- 児童が着目した内容と、行動を結び付けて確認する。
- 擬音語や動作で具体的に確認したり、イラストや写真を提示したりして、理解を助ける。
- 学習の足跡として、活動中の写真や成果物を提示する。

以上のように、生活科の資質・能力のより着実な育成に向けて取り組んでいく。(文責 清野 健男)